

「命を守る安全教育の推進～主体的に考え行動する力の育成～」

令和2年度 高知県学校安全総合支援事業（交通安全）

香南市教育委員会 拠点校 香南市立赤岡小学校

1 事業の目標

(1) モデル地域の現状及び安全上の課題

本市の中央部には、国道55号、高知東部自動車道が市を東西に横断するように敷設され、県中央部と東部を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしており、自動車の交通量が多い。

本事業の拠点校である赤岡小学校が属する赤岡中学校区（モデル地域）には、2つの市立小学校、1つの市立中学校、そして1つの県立高等学校があり、登下校については、小学校では徒歩、中学校・高等学校においては、自転車または徒歩での通学となっている。

拠点校、及びモデル地域の児童生徒の多くは、国道を横断する必要のない通学路を使用しているが、中にはそれを要する児童生徒がいるうえ、量販店や日用必需品を販売している店舗は国道沿いに多く、日常的に国道脇の歩道を利用する状況が認められる。また、日常的に使用しているいわゆる生活道路においても、路側帯のない狭い幅員の道路や見通しの悪い交差点も存在し、事故の危険性は決して低くない。

(2) モデル地域の事業目標

- 拠点校（モデル地域）の取組内容や成果を市内全域で共有し、学校安全担当教員を中心に、学校安全の取組を推進する。
- 児童、教職員、保護者、地域住民等による街頭啓発等を実施し、地域全体で交通安全に取り組む体制の構築を図る。
- 「高知県安全教育プログラム」に基づいた授業を実施することで、子どもたちが身の回りの危険を予測し、自ら危険を回避する力を身に付け、自分の命は自分で守り、安全に行動できる児童の育成を図る。

2 モデル地域の取組の概要

(1) 安全教育の充実に関する取組

ア 安全教育の充実に向けた取組

拠点校の公開授業や発表会などを管内の学校に周知し、参加への呼びかけを行い、拠点校（モデル地域）の取組内容、成果を広く普及する機会を設定する共に、参加した教職員がそこで得た知見を在籍校の校内研修等で周知・普及するという一連の取組により事業の推進を図る。加えて、拠点校の発表会を各学校の管理職、及び学校安全担当教員を対象とした悉皆研修として位置付け、学校安全に係る管理職、中核教員としての資質・指導力の向上を図るようにする。併せて、校長会等の場も活用しながら、拠点校（モデル地域）の取組発表・報告等を行い、市内全域の安全教育の推進に努める。学校安全担当教員（中核教員）には、各学校における先導的立場として、事業実施後も拠点校の取組を自校の取組に活かし、学校安全計画、危機管理マニュアル等の見直しや改善作業、県作成の安全教育プログラム等を活用した安全教育を推進するよう支援を行うようにする。また、家庭や地域、その他関係機関が連携して、学校安全の推進が行えるように支援していく。

イ 安全教育の取組を評価する・検証するための方法について

取組を評価・検証するための方法として、「交通安全教育取組状況調査」を年間2回実施し、検証改善を図る。

(2) 組織的取組による安全管理の充実に関する取組

教育計画等の見直し時期に合わせ、全ての学校において危機管理マニュアルの見直しを行い、本年度は、年度途中に開催される防災教育研修会（県主催）後、拠点校の公開授業研修会後に、それぞれ校長会を通じ、再度マニュアルの見直し・更新と、参加した学校安全担当等教員から学校教職員に向け、研修内容を確実に周知する旨を伝達し、取組の推進につなげる。

(3) 学校安全担当教員の資質向上に係る取組

拠点校の発表会を各学校の学校安全担当教員を対象とした悉皆研修として位置付け、学校安全に係る中核教員としての資質・指導力の向上を図るようとする。また、学校安全担当教員（中核教員）は、各学校における先導的立場として、事業実施後も拠点校の取組を自校の取組に活かし、学校安全計画、危機管理マニュアル等の見直しや改善作業、県作成の安全教育プログラム等を活用した安全教育を推進するよう支援を行う。

(4) モデル地域全体への普及

モデル校区の公開授業研修会に対して、市内の全小・中学校から学校安全担当教員と管理職が参加する体制を整え、公開授業や授業をめぐる協議、研究報告、及び高知県教育委員会事務局学校安全対策課の講話を聴講することで、モデル地域の取組、学校安全の取組の推進の重要性について一度に多くの教職員・学校に普及・啓発していく。

3 拠点校の取組

(1) 拠点校の目標

- 児童の交通安全への意識を高め、登下校中や自転車運転中に、自ら安全な行動がとれるようにする。
- 保護者の交通安全への意識を高め、児童のヘルメット着用率を向上させる。

<背景と課題>

①道路環境等

- ・県の東部地域に繋がる自動車道が開通したことから国道を通る車は減少したものの、かえってスピードを出す車が増えている。
- ・国道や川沿いの道路以外の通学路は交通量が多いとは言えないが、道幅は狭く、歩道もなく、車とすれ違う時には注意が必要である。
- ・学校周辺は古い町並みが残された地域で、道幅が狭く、道路が入り組んでいたり、見通しの悪い路地があったりする。

②児童の状況

- ・安全への意識が薄い児童もおり、地域の方から交通量の多い国道を歩道橋や横断歩道を渡らずに横断したり、車がすれすれで通っている狭い道路に路地から飛び出したりする危険行為が報告されている。
- ・校区が狭いため全員が徒歩通学であるが、放課後や休日に自転車を運転する際にヘルメットを着用していなかったり、道路の右側や中央部分を走ったりする姿を度々見かける。
- ・保護者にはヘルメット着用への協力を依頼しているが、ヘルメットを持っていない児童やヘルメットを持っていてもかぶらない児童がおり、児童と保護者ともに意識の向上を図る必要がある。

(2) 安全教育の充実に関する取組

■目標達成を目指した取組のポイント

- 教員自らが交通安全指導への意識を高め、指導方法を探究する。
- 交通安全教室や交通安全指導をより効果的に行うよう内容を検討する。
- 交通安全マップの作製など、総合的な学習の時間を活用して児童自らが交通安全について、課題を発見し、解決策を考えることで意識と行動の変容につなげる。
- 児童から児童や保護者、地域住民に交通安全への啓発活動を行う。

■具体的な取組

①実践委員会：地域の交通安全関係者や保護者等を交えた実践委員会を年2回開催 第1回 10月8日（木）

- ・事業の目的及び取組状況について報告
- ・取組への意見や助言について協議

第2回 2月実施予定

- ・第1回実践委員会後の取組状況についての報告
- ・取組成果についての検証と今後の展開について協議

②交通安全アンケート：児童と保護者を対象に年2回実施（6月・12月）

<第1回アンケート結果（6月）から>

- ・児童の肯定的回答は高いが、保護者の肯定的回答が低いことから、児童は自分ではできていると思っているが、実際はできていないことが窺えた。
- ・ヘルメットの着用率が低い。かぶっていない理由には、「暑い」「面倒くさい」という児童の意識とともに、「ヘルメットが壊れている」「家がない」など家庭環境によるものもあった。
- ・道路の通り方や自転車の乗り方について「家庭で話している」の項目は、保護者の肯定的回答は高いが児童の肯定的回答が低いことから、保護者は道路の通り方や自転車の乗り方について、子どもたちに注意をしているつもりでも、子どもたちには届いていないことが窺えた。

※この結果を「校長室だより」に掲載し、保護者に協力を依頼した。

<第2回アンケート結果（12月）から>

- ・児童のアンケート結果では、「道路の通り方」については肯定的回答が下がった項目が多かったが、「自転車の乗り方」についてはほとんどの項目で肯定的回答が増えた。
- ・ヘルメットの所持や着用についても肯定的回答が10ポイント向上した。
- ・児童と保護者の肯定的回答に大きな差が見られる項目がまだあるが、「自転車の乗り方について家の人と話をする」という児童の肯定的回答の割合が15ポイント高くなっており、家庭での協力が窺えた。

③校内研修

■教員による交通安全マップ作成

教員自身が交通安全マップを作成することにより、指導方法を検討した。

- ・マップ作成の前に、グループに分かれてフィールドワークを行い、通学路の危険箇所や安全対策が取られている箇所などを確認した。（5月27日）
- ・フィールドワークの結果をもとに、マップづくりの演習を行い、書き込む内容や表現の仕方など指導のポイントについて協議した。（6月24日）



■リモート形式での校内研修

当初は東北工業大学小川和久教授に來校していただき校内研修を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症のため、リモート形式の実施に変更した。

- ・事前にオンデマンド配信されていた「学校安全教室推進講習会」における小川和久

教授の講話を視聴し、安全教育の考え方と指導ポイントを学習した。(8月4日)

・リモートでの校内研修(8月26日)

小川教授の講話から次のことを学んだ。

◎児童の行動心理や発達段階に応じた指導方法

◎赤岡小の通学路の危険箇所や危険回避の方法

講話後にブロック別に講話で学んだことを活かした指導内容や指導方法を協議した。

◎低・中ブロック：交通安全教室までの事前学習及び事後学習について

◎高ブロック：5年生「総合的な学習の時間」の展開について



④交通安全教室

警察だけでなく地域住民や保護者、関係機関の方にも協力していただき実施した。

<1・2年生> 安全な道路の通り方について

・小川教授の講話を参考に大きな段ボールで死角を作り見通しの悪い交差点での「止まる・見る・確かめる」行動を学習した。

・地域の方に見守られながら、実際に通学路の一部を歩き、安全な通り方を実践した。

<3～6年生> 自転車点検や安全な運転の仕方について

・自分でできる自転車点検を実践

「ぶたはしやべる」(ブレーキ タイヤ ハンドル 車体 ベル)

・運転のルールやマナー、「右・左・後ろ」の安全確認の大切さを学習し、繰り返し練習した。

・自転車は車両であり、事故では加害者となり大きな代償を払う可能性もあることを学習した。

・ヘルメット着用が自分の命を守ることにつながることについて、学習した。



⑤5年生「総合的な学習の時間」における交通安全学習

テーマ「安全な町づくり」

赤岡町の道路の実態や自分たちの行動から問題点を見つけ、より安全な町にしていくための活動を通して、自分たちができることを考え、自分だけでなく、家族や地域の安全のために行動できるようになることを目標に取り組んだ。

■第1単元「赤岡町の交通安全の課題について知ろう」

・アンケートや地域住民へのインタビューで情報収集した。

・インタビュー等で得た情報をグループごとに発表し、出された課題を整理し、まとめた。

■第2単元「交通安全マップを作ろう」

・フィールドワークで通学路を中心に地域の実態を調査した。地域の方にも同行していただき、ポイントとなる場所等での助言で多くの気づきがあった。

・フィールドワークで調べたことをまとめ、交通安全マップの内容を考えた。

・公開授業研究会の実施(11月18日)

香南市立小中学校の先生方や地域の方など約60名が参加

◎公開授業 5年担任：石川悠

◎研究協議



◎実践報告

◎講話「生き抜く力を育むこれからの安全教育」

講師 高知県教育委員会事務局学校安全対策課

企画監 吉門 直子 氏

- ・2回目のフィールドワークでさらに探究し、マップの完成度を高めた。
- ・マップの完成（12月中旬）

■第3单元「調べたことを地域に発信しよう」

- ・完成したマップをもって各学年を回り、交通安全を呼び掛けた。
- ・安全標語を書いたたすきをかけて、登下校の時間に正門前や通学路に立ち安全な道の通り方を呼び掛けた。
- ・廊下の通り方など校内での安全行動についても注意喚起を行った。
- ・交通安全マップをポスターやクリアファイルにして、香南市内の学校や施設に配付した。（1月～2月）
- ・学習発表会で交通安全マップを紹介し、児童や保護者、地域住民に安全な道路の通り方や自転車の乗り方について啓発した。（2月28日）

(3) 安全管理の充実に関する取組

○集団下校指導（4月10日）

地区別に黒潮の子ども応援隊（※地域学校協働本部の地域ボランティア）と消防団の方々に同行していただき、通学路を歩きながら安全な道路の通り方や地震が発生したときの身の守り方、避難場所について学習した。

○交通安全街頭指導（毎月第2・3週 各1回）

黒潮の子ども応援隊と赤岡小学校PTA校外指導部による見守り・指導

○香南市通学路危険箇所合同点検

教員のフィールドワークから把握した危険箇所について報告し、改善策を検討

(4) 成果と課題

■成果指標

- 児童の交通安全に関する知識や理解が向上し、安全な行動がとれるようになる。
 - ・交通安全アンケートにおける肯定的回答のポイントが向上する。
- 児童が学校や家庭、地域の安全に進んで関わろうとするようになる。
- ヘルメットの着用率が向上する。
 - ・交通安全アンケートにおける肯定的回答のポイントが向上する。

【成果】

- アンケート調査の結果、児童の自転車の乗り方についてはほとんどの項目で肯定的評価が向上した。10ポイント以上向上した項目も多かった。
 - ・並列運転をしない 83.1%→93.2%
 - ・歩行者にベルを鳴らさない 68.5%→79.5%
 - ・家庭で話をする 39.5%→55.3%
 - ・自転車点検をする 66.7%→78.9%
- ヘルメットについては、ヘルメットを新規に購入してくれた家庭もあり、「自転車に乗る時にヘルメットをかぶる」と回答した児童も増えた。
 - ・ヘルメットを持っている 74.1%→84.2%
 - ・ヘルメットをかぶる 59.3%→71.1%
- 個人別に見ると、1回目のアンケートでは「知らなかった」と答えた項目（「自転車の左側通行」「歩行者にベルを鳴らさない」など）について、2回目には「できている」と答えられた児童も増えており、交通安全教室や事前事後の学習を通じて交通ルールやマナーを学ぶことが行動の改善に繋がったことが窺える。
- 総合的な学習の時間に取り組んだ5年生は、フィールドワークや地域住民へのインタ

ビュー、交通安全マップの作成を通じて地域の現状を知り、自分の安全行動を振り返ることで、交通安全に対する意識が高まり、主体的に取り組む姿勢が養われた。

- ・より良いマップにするため、2回目のフィールドワークを行った。
- ・出来上がったマップをもって各学級をまわり、交通安全への啓発を行った。
- ・登校時と下校時に「一時停止」や「右側通行」などを書いたたすきをかけて正門前や通学路に立ち、安全な通り方をするよう他学年の児童に呼び掛けた。
- ・校内での安全行動の大切さにも気が付き、「廊下は走らず歩くこと」や「右側通行」を呼び掛けた。

○交通安全教室において、地域や関係機関の方に協力していただくことでより効果的な指導を行うことができた。

- ・各ポイントとなる場所で手厚い指導や確認ができた。
- ・地域の方にも見守っていただくことで、低学年の児童が実際の道路を歩いて安全な道路の通り方を学習することができた。

【課題】

○道路の通り方についての肯定的回答が伸びていないことから、交通安全への意識は高まったものの、実際の行動に繋がっていないことが窺える。

○児童と保護者の肯定的回答に差があることや日常の児童の様子から、実際にはできていないが自分ではできていると思っているなど、自身の行動を客観的に捉えられていないことや安全行動への認識の甘さが窺える。

○ヘルメットが壊れていたり、買ってもらっていないなど、家庭の事情からヘルメットをもっていない児童がいる。

○ヘルメットを持っているものの、「面倒くさい」や「かっこ悪い」などの意識からかぶっていない児童もいる。「忘れてしまう」という児童もいる。

○児童の道路の通り方や自転車の乗り方を「家庭で話している」の項目について、保護者と児童の肯定的評価の差がまだ大きいことから、保護者の働き掛けが十分子どもに伝わっていないことが窺える。

○応募を予定していた交通安全標語コンクールなどが中止になったこともあるが、5年生以外の学年での取組が十分でなく、学校全体としての取組が弱かった。

【今後の取組の見通し】

○地域へのポスター配布や2月の学習発表会での交通安全マップの紹介など、3学期以降も5年生を中心に児童の主体的な活動で交通安全への啓発を行う。

○アンケート結果をもとに各学年が学級で話し合うなど、児童が主体的に考え行動できるように働き掛ける。

○来年度も総合的な学習の時間において「安全」をテーマに取り組み、交通安全だけでなく、災害安全や生活安全の学習にもつなげていく。

○5年生が作成した交通安全マップを来年度のコンクールに出品することをはじめ、全学年で交通安全標語コンクールに応募するなど学校全体の取組に発展させる。

○ヘルメットの着用など引き続き家庭への協力を働き掛ける。

○来年度も学校安全に関する校内研修を実施し、教員の安全管理や安全指導への意識と指導力の向上を図る。

4 事業の成果と課題

【成果】

○年度当初の校長会で香南市の事業成果指標を示し、定期的に報告・依頼・確認することで、取組の継続化、指標に対する実施校割合の向上につながった（項目①：年度内比+1校、項目④：年度内比+5校）。

○危機管理マニュアルの見直しについては、教育計画等の見直し時期に合わせて全ての学校が実施している。本年度はオンデマンド形式で実施された防災教育研修会（県主催）後に、校長会を通じ、再度マニュアルの見直し・更新と、参加（視聴）した学校安

全（防災）担当等教職員から学校教職員に向け研修内容を確実に周知する旨を伝達し、取組の推進につなげた。

- モデル校区の公開授業研修会に市内の全小・中学校から学校安全担当教員と管理職が参加する体制を整え、公開授業や授業をめぐる協議、研究報告、及び高知県教育委員会事務局学校安全対策課の講話を聴講することで、モデル地域の取組、学校安全の取組の推進の重要性について一度に多くの教職員・学校に普及・啓発することができた。

【課題】

- 各学校において、安全教育全体計画や危機管理マニュアルを作成し、年間指導計画に基づく安全教育を計画的に実施しているところであるが、他校や地域への情報発信が十分でない状況が認められ、今後もその意義を周知し、改善を図る必要がある。
- モデル地域の取組については共有できているが、各学校が自校の取組に活かしたり、随時見直しを図ったりするという検証システムの構築に向けた取組は、今後も継続的に行う必要がある。

5 今後の取組

本年度の成果を踏まえ、来年度も管理職以外の教員を学校安全担当者として位置付け、安全教育の中核として推進を図っていく。また、安全教育全体計画や危機管理マニュアルについて、保護者や地域への発信・周知していくよう各学校に周知し、改善を図る。教育計画等の見直し時期や県主催の研修会後等、機会を捉え、各学校に取組の推進、見直し等を含めた進捗管理について周知し、検証システムの構築に向けた継続的な取組を推進していく。